

30頁11行目

われわれの説教がたくさんの霧や雲を作るばかりで、明るさや光を広げることのほ
 5 とんどないのは、多くの説教者が、シュニーヴィントの不安を故意に見すごしている
 ことに関連があるかも知れない。おそらく彼らは、われわれが、そうした不安を克服し
 た時代に生きているように思っているからである。

(東神大学生説教塾録音⑤27分)ここはとってもおもしろいところで、不安に気づか
 10 ないんじゃないくて「故意に見すごしている」と批判している。なぜそんなことが起こるか
 って言う「われわれが、そうした不安を克服した時代に生きているように思っている
 からである」。これはひじょうに興味深い表現です。ボーレンさんは現代の人間ってい
 うのは、《失われた者が義とされる》。そういうことを求めている時代だと。つまり神が
 15 いないということのゆえに不安にとらわれているという人たちがいなくなっちゃったか
 のように思ってるのは錯覚だと言ってるんですね。

これに対して、やはり問わなければならないのは、教会や世界の中に憂鬱な思いが
 忍びこんでいるのは、われわれがシュニーヴィントの不安を抑圧してしまっている
 ところからくるのではないかということである。確かにわれわれは今日他の不安も知っ
 20 ている。しかし、それはいかなるものなのか！ それらはすべて、神から遠ざかっており、
しかもその神からのへだたりを持ちこたえられなくなっている者の根本的不安に根
 ざしているのではないか。しばらく、このような推測に踏みとどまることにしよう。も
 う少し厳密に言えばこう言える。わたしがこの書物を書くのは、罪のゆるしについて
 講義してみても、何らかの決断を求めて叫んでみても、それはわたしの助けにはなら
 25 ず、わたしを助けるのは、ただ判決そのものだからである。つまり判決がその名によ
って述べられる時、その方が、そこに現におられるような判決がわたしを助けるので
ある。わたしは、それ自体が奇跡であるような説教を期待する。説教が奇跡である
のは、そこで語られている方ご自身が、語られているそのことの中にはいってこれ、
ご自身で発言され、ただ単に神とその解放の言葉について語られるのみならず、そ
 30 のみ言葉がここに出来事となり、解放の言葉が実際に解放をもたらすようになるか

らである。

35 (⑤29分45秒) 私が説教っていうのは出来事だと言っていることのひとつの集中的な表現がここにある。神ご自身が説教の中でこの発言する。そういう説教を自分は待ち続けている。その時にはじめてシュニーヴィントのような神学者がまさに神学者であるがゆえに心の中で抱いていた不安に……向き[合い?], それは罪の赦し以外になるので、そういう出来事が起こるのだと言ってるんですね。

40 (⑤30分30秒) まったく話は別のようですけど。みなさんの中で読んでいる人があるかどうかと思いますが。日本で今ベストセラー。今のところは書店のベストセラーの第1位ではないようですけど。ずっとベストセラーになっていた村上春樹のIQ84 という小説があります。読んだ人います?……いないんだ。この書物おもしろいですよ。現代の日本を知るためにね。私はあまりベストセラー読む方じゃないんですけど。去年、あまりに評判になったので読みました。そして説教塾の紀要にもIQ84 について自分の分析をちょっと書きました。で、今度 No.3 でののが出たんですね。No.4 が出るかどうか
45 予告はないようですけども。No.3 を読んで、ちょっと読むのにしんどかった。実につまらなかったんですね。で、なぜつまらなかったかってことを今考えてるんですけど。文学界って雑誌に、この村上春樹のIQ84 をめぐって、3 人の大学教授たちですけど、文芸評論をしている人たちが座談会をしています。その座談会の一番最初に早稲田の准教授って人があっさりこう言ってるんですね。20世紀後半から神はいなくなったって。
50 そういう意味のことを言ってるんです。なぜ20世紀後半なのかって。おもしろいと思ってますけど。で、そのもう神がいなくなった時代の小説なんだと。その村上春樹のこの長編を規定してるんです。ずいぶんのんきなものの言い方だっていうふうに私は思います。

55 で、ボーレンさんは、神がいなくなるって、そんな簡単なことかとここで問うてるんですね。シュニーヴィントのような信仰者が、そういう神がいらない現代ってものが持ってる不安を、シュニーヴィントは深く福音に生きた人ですけれども、それだけにむしろ非常に強く感じていて、それに答える説教者はいないかとハレ中探したけど見つからなかったって言ってるんですよ。この問いは私はとっても深いと思ってるんです。つまり、まあ、そういうことをめぐって座談会ではそれについてはもうそれ以上言ってないし。IQ84
60 っていうのは私は宗教的な意味は持ってると思ってる。依然としてIQ84 のひとつの問題

は、現代において神の声が聞こえなくなってるっていうことなんですね。神の言葉が聞こえなくなってる。かつての天皇が天皇としてのほたらきを持っていた時はそうじゃなかった。つまり三島由紀夫の問いつてのがまだ残ってるはずなんですね。日本では。日本的コンテクストで。

65 (⑤33分53秒)でそれはそれとして。私は現代っていうのは、あの、現代の説教者は神の不在っていうことをはっきり見ないといけないと思ってるんです。実に多くの人々が神の不在のゆえに苦しんで、不安を抱いている。そういうときに教会だけはそういう現代的な苦悩っていうのと無関係に……その20世紀後半からって[1Q84の座談会で早稲田の准教授が20世紀後半から神がいなくなったって言ってる]、私は神の
70 不在が語られたのも少なくともニーチェ以来ですから、もっと以前にさかのぼることができると思っ
ていますけれども。しかし教会だけは前世紀の、今の神なき時代っていうものとは無関係の昔を
生きている特別な社会をつくっているわけではないと私は思っ
てるんです。そのことをはっきりと見据えてないと説教が説教の力を持たない。ここで
75 ボーレンさんが問題にしていることはそういうことですね。シュニーヴィントの不安とい
うのはそういう意味で個人的な不安ではない。時代の不安ですね。現代人の不安。それが
根本的な不安。

それがこの30頁の終わりから3行目のところ。「神から遠ざかっており、しかもその神からのへだたりを持ちこたえられなくなっている者の根本的な不安」。これがとっても
大事で。あの文学界の座談会ってのんきなんです。不安を持たないで神は存在しな
い時代になったなんて言ってますよ。それをもたらした根本的な不安に向かい合っ
てないんですよ。私はその点では、むしろ村上春樹の小説の中にはそういう不安って
80 いうものが隠されたかたちであるんじゃないかなーという思いがあります。だからかえ
ってあんなふざけた小説になってんだらうと。村上春樹の中には根本的な不安があるよ
うな気がしてならないんですけども。座談会も途中までしか読んでないんで。それから
85 先、そのテーマがまた戻って来るかどうかわかりませんが。そういうことを考えざる
を得ない。今ここでは村上春樹を離れて良い。

ボーレンさん自身はそういう点で、ただ教会内のことを言ってるわけではないんで
すね。そうじゃなくて、今こそそういうこの神なき不安。神からこんなにも離れたことで根
本的な不安にゆらいでいる世界だからこそ、ああここで神が語っておられるというこ
90 が聞こえて来る説教がどうしても待たれているのだと言ってるんですね。そういう教会

とは無縁のところ、もう神様なんかいないって言うてる人たちは無視して、楽観的に
っていうか、楽天的にっていうか、昔ながらにというか、神を信じている人たちのための
説教ってことを考えてはいないんですね。むしろ現代の根本的不安と向かい合わなけ
ればならない。そういうことがこの後にも出て来ます。そのことがこの神の言葉を失っ
95 てる、あるいは言葉そのものを失ってる現代社会のような問題にまで入って行きます
(⑤37分20秒)。

(質問)シュニーヴィントの不安は日本の教会もかかえてる？日本の教会の牧師も思
ってる？

100 (加藤先生)僕に聞いているの？あなたは どう思っているの？((答)そう思ってます)日本
の牧師もシュニーヴィントの持ってる不安を知っているの？(知らないと思います)大事
な判断だよ。で、あなたは知っているの？(いや、知らない)知らない？(それがどれだけ
大事か知らないと思います)

(後藤先生)要するに神不在の不安ってというのは、最近でしたらたとえば広島で秋葉
105 原のまねをした事件の中にも、深いところに神不在の不安があって。どうしようもな
くなってああいう事件を引き起こす。ああいう事件の深いところにあるんじゃないかな。
(加藤先生)でしょうね)

・そういう部分が至るところ顕著にニュースを見てると思います。自殺もそうですし家
族同士が殺し合う事件がひっきりなしに起こるのも根本的なところ神様を見失ってい
110 るところがあると思いますよね。

(後藤先生)そうするとボーレン先生が(今日読まれた最初のところで)危険も少ない
かのごとくであるって言われた危険[27頁11行目]は、聞く方の力のなさの危険なの
か、それとも説教の中に、神不在の不安をそこから解き放つような説教がなされてい
ない危険なのか？

115 (加藤先生)そう言ってもいいし。ここでは、これから先のテーマは「待つ」ってことにな
るわけですね。説教の聴き手が期待しなくなってること自体が恐るべきことなんですね。

(2021年11月8日読書会)

(安井先生)「シュニーヴィントの不安を故意に見すごしている」の「故意に」という
120 こと。触れちゃうと牧師の務めができない。正面から自分の問いにぶつからなくなる。

(加藤先生) 船戸良隆牧師からいただいた説教集。説教の中で若いころの話をされていた。まだ信仰も不確定で、あこがれることがあった。これで船戸さんも牧師になって牧師になってから悩む。若い時の純粋な悩み——神がおられないのでは——を悩まなくなる。

125 (戸村先生)「克服した時代を生きているように」

(加藤先生) 牧師になって神不在の悩みを克服してしまっている。

(戸村先生) 幼児洗礼のことは？

130 (加藤先生) 幼児洗礼は関係ない。昔は幼児洗礼を受けてないと差別されることがあったが、今はない。1960年代にマンフレート・ザイツと出会った。なぜハイデルベルクの教授に？とたずねた。ニュルンベルクの大きな教会の牧師をされていた。教会のある娘の結婚式を断った。その生活を容認出来ず、問題になった。娘の父親が乗り込んで来た。大きな会社の社長。こんなにたくさんの教会税をおさめているのにと苦情。新聞も支持。たまたまハイデルベルク大学から呼ばれた。

135 (加藤先生)「わたしを助けるのは、ただ判決そのものだからである」の意味わかりますか？この書物を書くのはというところ。ルター派の牧師がする説教は、主として「罪の赦し」。ルター派の牧師のための説教も、罪の赦し。罪の告白、悔い改めをどう引き出すかについて。ボーレンさんの「この書物を書くのは」というところ。そのように書くことはしないということ。

説教は神の来臨に備えること。

140 ドイツの教会の説教者の現実もふまえている。職業化することに生まれる問題。

(加藤先生) 説教をやめちゃっている今の方が、神不在の不安がある。夢を見る。おそらく死ぬまで戦う。自分の生き死にの問題。

145 奇跡を勘定に入れてる説教は「変」。一般に実践神学は pragmatic なもの。シュライアマハーは冠としたが。冠をかぶせないと花嫁衣装は成り立たないという意味であった。毎日曜日、神が乗り出して下さるのを待つ説教をする。こういう問題に文学者として取り組んだのがドストエフスキー。

(加藤先生) 奇跡を待つ。仕える説教。神を待ち続ける説教！

31頁 7行目

150 おそらく更にこういうこともゆるされよう。わたしは、そこで語り手自身が自分をそこ

に賭けることによって奇跡となるような説教を期待している。[これはあくまでも聴き手の側ですね(加藤先生)]宗教上のお役人が、日曜日に講話をしてくれるようなことでは、眠らせないまでも、あくびをさそうであろう。わたしが期待するのは、そこである人が、ひとのいのちを救うために自分のいのちを賭けるような説教なのである。

155 [ここからが重要な指摘ですね(加藤先生)]たいていの説教者は、あまりにも深く勇気を失っているので言葉に富んでいるのである。

(⑤42分30秒) 勇気ってのは不安と向かい合う勇気ですね。不安を避けてしまっている。だから言葉に富んでいる。

160

31頁 11 行目

そして彼らが勇気を失っているのは、聞いたことがないままに語っているからである。それゆえにわたしは、説教者にとっても、聴衆にとっても、奇跡であるし、奇跡となるような説教を待ち続ける(第三章第Ⅱ節及び第十九章参照)。その時、講壇に立つ人においても、その聴衆においても、ネリー・ザックスが、イスラエルについて歌ったことが成就する。「イスラエルよ、あこがれの頂点に立つ者よ、あなたの頭上には、奇跡が雷雨の如く注ぐ。あなたの時代の苦悩の山なみの中に降りそそぐ雨である」。——まさしくそのようなことが起こるために、わたしもまたこの書物を書こうとしているのではないか。

170 *****

ネリー・ザックス (加藤先生 有名なイスラエルのノーベル文学賞を得た詩人。ボーレンさんの最愛の詩人のひとりでした)

(ウィキペディアより) ネリー・ザックス(Nelly Sachs, 1891年12月10日 - 1970年5月12日)は、ドイツの詩人および作家。自らの苦悩と過酷な時代の体験のなかから数々の優れた詩を生み出し、戦後ドイツを代表する詩人の一人とされる。ナチス・ドイツによる迫害経験から、ユダヤ人の悲嘆の代弁者となった。1966年ノーベル文学賞受賞。

175



180

31頁うしろから3行目

そのとおりである。まさしくそのことを、これまで語ってきたのである。そして**そうなるべきなのである**。説教者はすでに先立って語られたことに仕えるべきである。

185 (⑤43分42秒)ここがつまりその前のところの「**聞いたことがないままに語っている**」
ってことに対する答えですね。で、すでに先立って語られたことがあるんだから、それを
聞けば勇気を持つことができる。

31頁うしろから2行目

190 奇跡に赴くべきである。雷雨のごとく奇跡は降り注ぐべきである。そして**わたしの書物**
は、学生たちへの呼びかけ以上のものであろうとはしていない。斜面の上にあって、
走り出そうとして不安になっている学生、道なかばにあって、何らかの意味で疲れ果
て、道を失ってしまっているような人に対する呼びかけである。奇跡に向かう途上で
の呼びかけである。これは必要なのである。なぜならば、奇跡は、自明なるものの反
195 **対だからである。奇跡は世界を変革する。創造の世界を変える。個人を変革し、社会**
を変革する。奇跡において変革が起こる。奇跡は、現在あるものの革命をもたらす。
奇跡は、ものをひっくりかえしてしまう。奇跡においては何かが起こる。しかし、この奇
跡を奇跡たらしめる出来事は神のなさることであり、計算不能であり、驚異の思いを
呼びさます。これを計画することはできないのである。

200

説教の計画をつくることはできる。しかし、約束された奇跡までも計画することは
できない。それゆえに、情熱、喜び、冒険、遊び、苦しみについてわれわれが述べてき
たすべてのことは奇跡に属するであろうし、これを呼び起こすことはできないのであ
る。それゆえにわれわれは数多く説教しながら、ほとんど奇跡を知らないのである。
205 **説教ならざる説教の数を重ね、その上に何らの奇跡も重ねられることのないままに、**
多くの人々が、説教をしているのである。

そうすると、**ひとつの説教論が奇跡行為の手びきにならなければならないのか。そ**
れがわれわれの考察の論理的帰結のように思われる。説教は奇跡である時に説教
210 **なのである。説教論は、説教が、奇跡そのものにほかならぬ説教になるようにと手び**

215 きをするのである。それゆえに奇跡行為への手びきなのである！——こうした論議において、いつも考慮されないままになっていることは、われわれは説教しながら、自分には不可能なことをやっているのだということである。せいぜいのところ説教論は奇跡への勇気を作り出し、奇跡を期待する手びきを与えるだけである。「どうか、あなたが天を裂いて下られるように」(イザヤ書六四・一)。このことがすでに示唆していることは、説教論は、み言葉に仕える者を雄弁の王者にする魔法の書物ではないということである！

220 「奇跡[Wunderヴンダー]」という用語にここで追隨して現われるのは「待つ」という用語である。奇跡にとって待つということは不可欠であり、奇跡は期待されることを欲するのであるとすれば、ここでは待つこと自体がすでにいささかでも奇跡に属することになる。説教が始まるまえに、多くの家々から、待つ人々がひとつの家にやってくる。説教者がその説教を準備し、学生が勉学を始めるに先立って、語りかけを待つ群れがある。わたしがこれまでしばしばいぶかしがったことは、按手礼や牧師就任式に際して、合唱、音楽、花、挨拶など、どれほどの無駄なことがなされてきたであろうかということである。それは栄光あふれる仕事始めの方法ではある。だがそれはしばしばそののち起こることにいささか適合しないのである。しかし、いずれにせよ、それも、み言葉に対する教会の期待、あこがれの心のしるしではあり得よう。説教とは期待された行為なのである。そして説教のつとめに備える者は、自分が期待されているということを、切に待たれているということを、承知すべきなのである。

230 *****

(⑤47 分45秒)ここはもうなんの説明も必要がない。非常に明晰な言葉で「説教は奇跡だ!」ということを語り続けているわけですね……ここはまだまだ今の問題が展開されて行くところで、36頁まで、この議論がずっと続くんですね。

235 (質問)31頁のおわりから2行目に「すでに先立って語られたことに仕えるべきである」とありますが、この「すでに先立って語られたこと」とは？

(加藤先生)どういうことだと思いますか？(先達の説教とか、たとえばルターの)いいえ、そんな意味はここでない。あるって言うてもいいけど、それが第一の意味じゃない。誰がどこですでに語っているの？(神が自分に語りかけている)どこで？(説教や黙想の中で)何を黙想してるの？(説教……聖書)そう。何よりも聖書そして聖書が証

240

している神の言葉の出来事でしょうね。

だから後で当然大きな問題になってくるのが聖書をどう聞くかっていうテーマになりますね。その前に出てくるのは、今のようなことをここでは一気に語りますけどね。説教者は困っちゃうわけですよ。説教は奇跡だとかね。奇跡を待たれてるとかね。困る。その説教者の困惑ってなんだろうかってことがこの次の考察ですね。そしてその困惑を克服する道がどのように備えられているかってことで聖霊論的な考察に入っていくんですね。

で、しかしその前提になってることは、ここでは今の「すでに先立って語られたこと」に先立つのはちょうど真ん中くらいの「**たいていの説教者は、あまりにも深く勇気を失っているので言葉に富んでいるのである**。そして彼らが**勇気を失っているのは、聞いたことがないままに語っている**からである」。これがそのさっきの「すでに先立って語られたこと」に仕えるべきだ。で、すでに語られたことに、ここでは語られたことに仕えるという表現を使っているのは明らかに《神の言葉に仕える》ことが説教者の務めだって。そういう古典的な考え方がここに反映している。

で、前のところで説教者に勇気がないと、つまり現代の神不在の状況に向かって大胆に言葉を語ることができないのは聞くべきものを聞いていない。聞くべきものを聞いていない時におしゃべりになっちゃう。だから言葉が豊かになるってことですね。人間の言葉が、おしゃべりが、説教壇をにぎわしてると。それは奇跡にはならない。だいたい説教者が自分が語る説教が奇跡になる。奇跡の出来事になるなんてことは期待していない。考えてもいない。起こったとしてもたまたま起こるだけだ。それが私が出来事としての説教という言葉でなんとも言ってることですよ。

奇跡ってたまにしか起こらないと思ってるんですよ。だからそれを言い換えると自分がしている説教が奇跡のわざだなんて思ってないんです。だけどここで奇跡ってのはネリー・ザックスの引用でわかるように雷雨のごとく注ぐんです。降り注ぐ雨なんです。時々ぽつっと天から落ちて来る水の滴りみたいなものじゃないんですよ。ざあざあ降って来るんですよ。

(⑤54分 40 秒) (質問) 内容からはずれるかもしれませんが。ボーレン先生こういうふうには思索が深まる論述をされて行きますよね。考察を深めて行かれるっていうか。そういう面ではボーレン先生というのは哲学的素養があるんでしょうか？

(加藤先生) ここではしかし哲学とかなんとかの問題じゃなく神学でしょう。哲学に借りたってどうしようもない。

(問) 考察する素養っていうか？

275 (加藤先生) これ素養の問題じゃないですよ。たとえば単純なこと言うとね。私、近頃、特に考えさせられるのは、ひとつの例を挙げるとたとえば子供の伝道ですよ。今、私が関わっている連合長老会の明解カテキズムってカテキズムを作って、そして鎌倉雪ノ下教会などでも使ってるんだけど。ええ、今週の東京説教塾の例会でも、子供のための説教がテーマになって、それを取り上げた牧師たちが、全部じゃないけども、明解カテキズムを説教の中で取り上げて。そうすると説教そのものよりも明解カテキズムに
280 対する批判があって、どうしてこんな難しいものを使うのかって問いが出て来る。で、そのカテキズムを使うことについては、私は反対ではないんだけど、そういうことの中にあるひとつの問題点を言う。今、明らかに各教会の教会学校は惨憺たるものですよ。で、その教会学校はそれでももってるのは、主として教会員の子供が来てくれるからです。せいぜい。それで後、来なくなってる人もいますけど。

285 それでその子供の時から教会学校に親しんでる人たちに、子供たちにとっては明解カテキズムってというのは、教会のカテキズムって言われる、ある意味堅苦しい表現に、ある意味では慣れちゃう、慣れさせちゃうんですね。で、そうすると教会にまったく関係のない子供たちには明解カテキズムの言葉なんていうのはちんぷんかんぷんですよ。で、それを説く説教の言葉もちんぷんかんぷんですよ。届かない。で、そのことは私は
290 考えざるを得ないんですけども。

子供のところで典型的に起こってることは、教会全体の営みでもそうですけども、今の日本の多くの教会は、教会の周囲に生きている現代の日本人の心には触れないで、教会っていう、ある囲いの中での縮小再生産をやってるだけです。だから信仰の継承なんてことがしょっちゅう言われるんで。私は信仰の継承について講演を頼まれた時に、信仰っていうのは財産じゃないと。家や土地を子供に継承してもらうように、わたしの信仰を継承してもらいたいなんて言えないんだと。それをどっちかって言うと財産を子孫に受け継ぐように、信仰を受け継いでもらうと言うようなところで、信仰の継承ってことが言われる。教会内でしか分からない言葉で説教がなされる。教育がなされる。すると教会の周辺。教会の群れの周辺の社会とは無縁の営みをしているだけです。これは一種の縮小再生産で教勢は伸びっこないですよ。教勢が伸びるってのは伝道
300

しなきゃいけない。伝道ってのは教会にまったく関係がないところで苦しんだり悩んだりしている人のところに言葉が届かなきゃいけない。

305 で、子供たちになぜ伝道できないかっていうと。今の子供たちは忙しいとか。親が教会に関心を持たないとか。それじゃあ伝道なんか出来っこない。まわりの者が教会に関心を持つことを期待していたら、そんなところで伝道なんか出来っこない。偶然のなんかが起こる他ない。でもこれは子供の問題だけですよ。

310 大人の問題ですよ。われわれの説教ってのも縮小再生産で。だから神を信じない。神はいないってことのために、どうしようもない存在のむなしさをかかえている。そういう人たちのところに神は生きておられるって証しの言葉を届けることができない。ボーレンさんが言ってる問題はそこでしょう。そこで神の存在が明らかになるってことは、明らかに奇跡としか言いようがない。で、われわれの教会は奇跡を期待しなくなっちゃってるんじゃないですかとの問いですよ。

315 信仰が起こる説教の言葉が届くってのは奇跡なんだ。それを奇跡が起こるってことも考えなくなってる。で、その奇跡の言葉を語るってことに命を賭ける勇気もなくなってる。勇気もないと自分が知ってる。自分の言葉が通じている、ある少数の範囲の人たちに言葉豊かに何かを語ってる。で、そこで、ある宗教的な楽しみがあるかもしれない。しかし教会のまじわりの外にいる人たちにとっては無縁のままだと。これは今でもヨーロッパの教会がかかえている問題だけど。日本の教会だって同じ問題。だから文芸評論家がもう神なんかなくなっちゃったと、20世紀後半からそうなったなんてことをの
320 んきに言ってること自体がひどく悲しいし、言わせておくことも非常に残念だし。

325 だからみなさんが神学大学を出て牧師になった時に、それこそ使い慣れた言葉を聞き慣れている人たちの、親しい仲間をようやく保持するだけの、言わば牧師になるのか。それとも突きぬけて伝道する姿勢に勇気を持って生きるのか。そういう問いでしょう。ボーレンさんが問うているのはそういうことだと私は思う。

〔⑤〕 時間2分50秒からIQ84の話 大江健三郎の「水死」を買いに行ったら他の本の中に埋没していた。でもIQ84はすでに第4刷] どうしてああいいう本が売れるのかって言ったら、伝道者として読まざるを得ない。こっちの好みの問題じゃない。ああいいう本を好んで読む日本人の心って、どういう心かってことは、どうしたって読みたいですよ。日本人を知るために。これはみなさんにとって大事なことです。今の教会にまったく
330

触れてない日本人が何考えているか。なんで悩んでるか。なんで悩んでないか。これ、どうしたって知らなきゃならないですよ。(⑤1時間5分25秒まで)

(2021年11月8日読書会)

335 (戸村先生)いのちを賭けるということについて。

(加藤先生)主の日の説教に自分のいのちのかかっていない説教がありますか？

340 (加藤先生)ネリー・ザックスのこと。当時ベルリンの住まいの扉にポストの穴が開いていたが、こちら側に受けるものがなかった。配達があると玄関の床に郵便物が散った。ちょうどある時、私とボーレンさんが扉のところで立ち話をしていた。すると配達があり郵便物が散った。そしたらボーレンさんは「オー、ネリー」と飛んで行って、ネリー・ザックスの手紙だけ抱え込んで自分の部屋に行ってしまった。まるで恋人からの手紙のように。

345 (加藤先生)今読んでいる第1章、序論的な部分、本になってからはじめて読んだ。後で記された部分だと思う。この後の第二スイス信条に定義を求めるあたりが、ボーレンさんとの最初の出会いだった。説教の定義についてたくさん書き抜いたけど、何の役にも立たなかった。奇跡を待つ、神に賭けるということと、安全運轉の説教との対比。後者は自己満足ではあるが、それに心みたされる人もいるでしょう。自分の豊かな言葉に寄った説教の方が安全である。

350 (加藤先生)「奇跡 Wunder ヴンダー」は、たまたまだと思う。期待してないことが起こること、偶然だと思う。しかしここには偶然はない!バルトの福音の捉え方。神は存在なさるのかとの問いに説教が答える。

(加藤先生)神の言葉。第二スイス信条。聖書が証しているみわだが、しかし、今、ここで起こっている。今は、救いの時!

355 (加藤先生)クルト・マルティはボーレン先生の同級生。説教と詩。おやと思う。たいていの人はボーレンさんが詩人だからと思うでしょう。スイス現代の詩人10人に必ずあがっていたのがボーレンさんとマルティ。スイスでは説教者として以上に詩人としての評価が高かったのかもしれない。